
ファミリーラヴァーズ

シンタグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファミリィラヴァーズ

【Nコード】

N1683T

【作者名】

シンタグマ

【あらすじ】

私、庸子はブラコン気味だった自覚はある高校三年生。努力型の優等生を保っているのは、幼少期の忌まわしい記憶のせい。

不在なことが多い両親、そして素直じゃないけどかわいい弟は本当に大切な家族。でも弟の隆哉は「姉としてじゃなく」私のことが好きだっていい出し、何だか最近周辺が穏やかじゃないんですけど
！！！！

とりあえず弟に口説かれつつ、それにマジレスしたりスルーしたりしながら周囲の変化を受け入れていく主人公の話を目指します。

あれ。

壁際に追い詰められた私の顔の両脇には弟の腕が伸ばされていて、完全に捕獲されてる状態ってヤツだろうか。

「た、たかや君？」

焦りを隠しきれない声で弟の名前を呼ぶ。媚を含んでいることは否めない。

からかいが過ぎたことは自覚している。これまでに何度も「やめろ」って言われていたし。

しゅる、と左頬を下から撫でられ、私は思わず首をすくめて目をつぶった。

「ああ、そうか。」

予想より落ち着いた声が耳元でして、私は目を開き彼を見上げると、彼は今まで見たことがない攻撃的な笑顔を見せた。

……かなり、怖いんですけど。餌を捕獲した肉食獣は獲物に止めを刺す際、きつとこんな表情をみせるんじゃないだろうか。

「我慢なんかないで、さっさとこうすれば良かった。」

低い声でそう言い、鋭い目線を私に向ける。視線だけで殺されそうだよ、元々私は小心者なのだ。

「我慢、してたんだ……。」

私のこと、それ程にイヤだったんだ。

頭半分背の高い彼の目を見上げる。

「相当、ね。」

あっさり肯定されて、なんだかショックで俯いてしまう。

私が弟に行き過ぎるほど絡んではたのは愛情表現のつもりだったんだけど……。

唾を飲み込む音も響き渡るような一瞬の静寂。

弟、隆哉の強いまなざしは私を突き刺すようだった。

威圧感がすごい。

「……そんなに……」

語尾が涙声になるのを止められない。

「え……つと？」

涙、止まれ。

隆哉もびびってるでしょ、情けない。

「そんなに嫌われてるなんて、思わなかった……。」

大粒の涙が瞳から溢れるのを止められない。私は片手で口元を覆い
嗚咽を抑えた。

「はあ！？」

涙に驚いた隆哉がわずかに身を引いたのに乗じて、私はその横をす
り抜ける。

隆哉の部屋から廊下を挟んだ向かいが私の部屋だ。

「ちよつ、まてつて、……っつ！」

隆哉に腕をつかまれそうになったけど、全力で振りほどき（なんか
彼のみぞおちに肘が入った気がするけど）、私は自分の部屋に駆け
込んでドアを閉めた。

震える手で鍵を閉めて、ベットにもぐりこみ布団を頭からかぶる。
ドアをガンガン叩きながら隆哉が何か言ってるけど、聞く余裕なん
てない。

布団の中で小さく丸まる。

セイリ二日目でお腹痛い。

今日で中間テスト終わりで、昨日は遅くまで勉強してた。

いつもに増して情緒不安定なのは、そのせいだ。

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を布団に押し付けながら、声を
出さないようにして泣く。

ちよつと今は疲れてるだけ。

弟が例え私をうざったく思っているとしても、私は彼を好きだ。
その気持ちは揺らがない。

だって家族なんだから。

『パパに本当のことなんて言えないわよね。』
この女は魔女だ。だってその唇から毒を紡ぐ。

『あなただけが……なんだって。』

そんなことない。嘘だ。聞きたくない。

要らない子。

私の頭をつかんで、窒息してしまうくらい強く抱きすくめて、魔女は耳元でささやく。

『あんただけ幸せに生きてるなんて絶対許さないからね。要らない子の癖に。』

その後は、どうなったんだっけ。

久しぶりに、あの夢を見た。

あれは現実の遠い記憶だ。胸がきしむ。

私は小さくため息をついて身を起こした。どうやらあのまま寝てしまったらしい。

枕元の時計を見て確認すると、一時間ちよつと経っていた。

嫌な汗をかいていて、全身がべとつく。顔があたっていた部分の布団が鼻水と涙でぬれているのに気がつき、私は顔をしかめた。

……恥ずかしい。

良く考えてみなくても、弟の前で盛大に泣いてしまった。小学生以来かも。

しかも、大したことないことで。

テスト終わったハイテンションで帰宅した後、弟の部屋に乱入して机に向かう弟に後ろから抱きついて「だーれだ」をしたら、本気でウザがられちよつと脅されたっただけで号泣、って……。

うつつ。冷静に思い出すとバカ過ぎだろ、私。かなり落ち込むわー。

『要らない子の癖に。』

あの女の言葉をまた思い出して、私は唇を引き締めた。
そんなことない。

私はもうあのときの小さな私とは違う。

……頑張ろう、そんなつまらない女の悪意に飲み込まれないように。
机の上のティッシュをとって鼻をかんだ。

立ち上がるとドロリと血が流れるのがわかり、気持ち悪くなる。…

…ナプキン、取替えないと。

ノブを回しドアを開けようとすると、何かがつつかえて開かない。
力を込めて押すと、不機嫌そうな声が聞こえた。

「ってーな、ガサツ。今どくからちよつと待てよ。」

隆哉だ。

そりゃ、あんな感じで部屋に籠られたら困るよねえ。

どうやら出てこない私に閉口して、ドアの前で読書か何かしてたみたいだ。

「……落ち着いた？」

ドアから顔を出すと、ドア前から横にずれた様子の隆哉と目が合った。

壁に背を付けて胡坐をかいて座っていた。

もしか、私が寝てる間ずっとドアの前にいたのだろうか。まさか、ね。

「うん……急にゴメン。最近ちよつと寝不足で……。」

恥ずかしさに声が小さくなる。視線を落とすと、数学Aの参考書が目についた。

「勉強してたの？」

「……今日でテスト終わったお前とは違って、オレは明日までのの。」

むすつとした表情でそう言うと、隆哉は腰を上げた。

「あんま勉強の邪魔すんな。」

言うなり、私の頭に手を伸ばす。小突かれることを予想して思わず目をつむったけど、予想に反してその手は私の頭を撫でただけだっ

た。

「……嫌いじゃないから。」

ぶっきらぼうな隆哉の言葉に、私は目を開く。

「むしろ……だから、その正反対。」

弟はそう言うなり、不機嫌そうに自分の部屋に戻っていった。

廊下に取り残されたのは、私一人。

背はとつくに抜かれて声も低くなり、少年から青年に移りつつある
反抗期真っ只中の彼だが。

「……カワイイなあ。」

思わぬところで胸がきゅんとした。

やっぱり隆哉、大好きだ。

「それでね、驚いたことにケイ君っていう四歳の子がね……」
テンション高めにクスクス笑いながら話しているのはお母さん。

24時間オープンしている保育所の保母さんをしている。園長をしてることもあつてとっても忙しい。

時折重々しく頷きながら静かに夕食を咀嚼しているのがお父さん。
会計だかなんだか（実を言うとおんまじ良くわからない）の仕事を
していて、出張が続く毎日。こちらもまたすごく忙しいみたい。

「そんなしゃべってて良くメシ食えんな、母さん。」

いつものことながら隆哉はあきれ気味にそう言い、おかずを口に運んだ。

久しぶりの家族揃つての夕食。

隆哉が中学生になって、お母さんが本格的に仕事を始めてから食事を姉弟でとることが格段に多くなった。

だからたまたま両親共に早く帰ってきた日の、四人で過ごすこんな時間はちよつと特別。

「……なんだよ。」

苦笑を浮かべながら隆哉は私を見た。

「え？」

「ニヤニヤしすぎ。」

手を伸ばされ、頬をつねられる。

「ちよつ…何…」

「米ついてる。ガキかよ。」

きゅつと口元をこすられ、背筋がぞくつとした。

何ですか、この無駄にアダルティーな雰囲気は。

わずか高1にして一瞬でこの空気を作り出すとは…、将来を憂うレベル。

そんな中、お父さんもお母さんは相変わらずマイペースに、全然関

係ない話をペチャクチャしゃべったりモグモグしたりしてる。

オイオイ。家に居るときくらい少しばかり子供たちの様子に気を配ってくれてもいいと思うの。

一瞬遠い目になりかけた私だけど、隆哉のしぐさにぎょっとした。

私の唇をこすった指を、ペろりと舐めたのだ。赤い舌がのぞく。

驚いた私と目が合うと、ニヤリと笑った。

なななな。

「何……!!」

動揺して立ち上がると、さすがに両親の視線がテーブルを挟んだ私たちに注がれた。

「……全部食べたのか？」

「仲いいのはいいけど、じゃれあうのは食事終わってからにしないね。」

穏やかな両親の視線に、私はなぜだか焦ってあわてて座る。

横の元凶は何事も無かったかの様に平然と味噌汁を啜っているのが忌々しい。

横目で軽くにらんで、残りのご飯に手をつけた。

「ごちそうさま。」

自分の分を食べ終わった隆哉は、さつさと茶碗を台所に下げ自分の部屋へ戻っていった。

姉弟二人だけだとリビングでくつろいだりしてるけど、両親が居るときはさつさと二階に上がってしまうような気がする。

まあ高校一年生って何かと多感な時期だよね、まだ反抗期続いてるみたいだし。

明日までテストってさっき言ってたっけ。いつもなら文句言いながら皿洗ったりしてくれるけど、今日はそれどころじゃないのかもしれないな。

なんかいつもと様子が違うのも、テストのストレスだろうか。

私自身も情緒不安定だしね。隆哉のこと変だなんて言う立場に無い。そんなことを考えつつ、最後の一口を口に放り込んだ。

「庸子ちゃんはテスト今日までだったのよね、お疲れ様。」

「うん。ようやく一息つけるよー。」

笑顔でお母さんにそう返す。

お母さんの横に座るお父さんは相変わらず無表情で、食べ終えた食器を下げもせずテレビのニュースを見ていた。

「もう高校三年生かあ。いいわねえ、青春 真っ盛りってかんじ！？」

わざわざ頬に両手を添えて首をかしげながら、お母さんは言った。

「うーん、真っ盛りはもう過ぎた感じがするのですが。」

大体、私が行ってるのが女子高だということをちゃんと分かっているのだろうか。

私が高校生になってからというもの、しきりに恋バナを聞き出したがるのは彼女の悪い癖だ。

先ほどの言葉にもそういった含みを感じ取り、私は苦笑交じりに言

う。

「どっちかって言うと、受験で暗黒時代到来、って感じかも。」

席を立ち、茶碗類をシンクに下げる。ついでに洗ってしまおう。

食器洗い用のスポンジに洗剤を落とし何度か軽く握ってあわ立たせていると、食べ終えた食器と共にお母さんが台所に入ってきた。

「お母さんがやつとくから、庸ちゃんはいいわよ。」

「え、でもいつもやってるし。」

「だから。」

「でも、仕事で疲れてるでしょ。」

……押問答状態になってきた。

「なら、一緒にやるつか。」

困惑交じりに笑ってお母さんがそう言うから、私も少し笑ってうなずいた。

お互い頑固なのだ。

私そのままスポンジで食器を洗っている間に、お母さんは全部の食器を下げてダイニングテーブルを拭いた。

「あ、洗いあがった食器、拭いちゃうわね。」

「うん。お願い。」

二人、並んで立った。

おかあさんは小柄で、160センチちょうどの私より頭一個分身長が低い。

そんなおかあさんがキビキビ動くと、まさに「チヨコマカ」っていう表現がぴったりだ。

うちの台所はカウンターキッチンになっていて、シンク越しにダイニングテーブルやテレビなんかも見ることができる。テーブルに座った父は、熱いお茶をすすりながら夕刊に目を通していうようだ。

それにしても身長といい性格といい、見事なくらい正反対の夫婦。

私が預けられていたという保育園で出会わなければ、接点があったようには思えない。

これだけお互い忙しい生活をしているのに夫婦の絆が揺らがないのは、相性が良いってことなんだろう。

「よし、これで最後。」

言いながら箸を水切りして、水切り籠に入れる。

拭いて食器棚へ返す仕事に移ろうかな、そう思って顔を上げるとお母さんと目が合った。

「いつもありがとう。」

急にお母さんにそう言われて、なんだか照れくさくなる。

「何、いきなり。」

いつものことじゃん。

「なんかね、庸ちゃん良い子過ぎて時々心配になる。」

小さいお母さんが腕をいっぱいに伸ばして、私の頭を撫でた。

「あんまり頑張り過ぎなくていいんだからね。もつと我侂言って良いんだからね。」

……、なんだろう。

じんわりした暖かさと共に、すごい焦燥感が私の心に急速に広がる。心臓がぎゅっと縮んだ感じがする。

「頑張ってなんか、ないよ。」

なるべく冷静を装って声を絞り出す。

もつと頑張んなきゃ。

もつと頑張んなきゃ。

もつと頑張んなきゃ。

『要らない子の癖に』。

あの魔女の言葉を頭から追い出すには、全然足りないよ。テストで分かんない問題があった。

洗濯物、今日できてない。

昼寝して無為に時間を過ごした。

セイリのせいにして、感情コントロールが滅茶苦茶なのをごまかしてる。

もつと完璧にならなきゃ。

今の頑張りじゃ、全然足りない。

「全然、頑張つてなんか、ないよ。」

にこりと笑うとお母さんも笑ったけど、少し寂しそうに見えた。

実のところ、お母さんと私は全然血が繋がってない。後妻と娘って関係だ。

私が生まれて割とすぐ、お父さんは離婚して私を引き取った。そして、私を預けていた保育所の職員だったお母さんと出会い再婚して隆哉が生まれた。

私だけが血のつながりからずれている。

お母さんと私の関係はとも上手くいつているけれど、事實は覆せない。

外れている存在。

『要らない子の癖に』。

またあの女の声が耳元でして、私は唇をかみしめた。

「もうすぐ18歳なのね。」

気を取り直したようにお母さんが言った。

「あつという間に大きくなっちゃうもんねー。」

カウンター越しにお父さんに視線を送る。

「ねえ、あなた。」

お母さんの声のトーンが少し変わった。

「庸子に判断させるべきじゃないのかな。」

……何をだろう。

「何だ。」

無表情にお父さんは答える。大きくはないけど良く通る声だ。新聞から顔を上げない。

「話した上で……。」

「由紀。」

静かだけど有無を言わせない勢いでお父さんはお母さんの名前を呼んだ。

「お茶。」

お母さんにそれ以上言わせないつもりみたい。ほんと亭主関白やロ
ーだ。

なんだか何時に無く妙な雰囲気だけど突っ込まないほうが良い気が
して、私は二階の自分の部屋へ戻ることにした。

「俺たちが親なんだから……。」

部屋を出る瞬間お父さんがそうお母さんに言ったのが耳に入って、
気恥ずかしい反面どんな会話内容なのか気になった。

すぐ立ち聞きしたい。でも聞かないほうが良い、本能的にそう思
った。

二階の自分の部屋に入り、学習机に向かう。

テストが終わったからって気を抜くことなんて出来ないのだ、受験生だし。

今日行われたテストの自己採点と分からなかった問題を分かるようにする、それがノルマ。

この地区で一番上位の公立女子高校に通うことができ、その中でそれなりの成績を維持出来ているのは毎日の地道な努力のお陰だ。

何だかモヤモヤする両親の含みのある会話や隆哉の妙な態度も、集中してる間は忘れることが出来る。

私は息をゆっくり吐き出し、目の前のテスト用紙に意識を集中させた。

トントン、というノックの音に気がついたのは部屋に戻ってから二時間ばかり経った頃だろうか。

「何？」

「……入っていい？」

隆哉の声だ。

「ちょっと話、したいんだけど。」

「どうぞ。」

「鍵、かかってねーんだけど。」

不機嫌そうに入って来た隆哉は風呂上りらしくグレーのスウェット上下、濡れた髪といういでたちだった。

「隆哉だっていつもかけてないでしょ。」

何をいまさら。

手元のノートから視線を外さずに私は対応する。

私が隆哉の部屋に乗り込むのは日課の事だけど、隆哉が私の部屋に来るのは久しぶりかもしれない。

何だろう、テスト前の最後の神頼み的な何かだろうか。

「お前はかける。」

後頭部にチョップされ、ノートに書いていた字がゆがんだ。力加減してるのは伝わってくるけど、ソレ十分痛いから。

「ちよつと！この問題が解けるまで、ベットに座ってて。」

怒りを込めて隆哉をにらみつけると、彼はあつさり頷いて背後のベツトに移動した。

勉強に区切りをつけるまでの時間ずっと背後に強い視線を感じて、全然落ち着かない。

何だろう。よほどの難問か。

隆哉も勉強は出来るほうだし、とにかく要領が良かった。

私は120点分の勉強をしてどうにか90点をとるタイプだが、彼は90点分の勉強で確実に90点をとる。

真似はできないけれど、その才能はうらやましい。

「お待たせ、何の用？」

首の筋を右に伸ばしながら椅子を回転させ、隆哉に向き直る。

「数A？物理？生物は私、教えられないよ。」

「勉強についてじゃない。」

むっとした表情で隆哉は私を見据えた。

「やっぱり、お前はスルーしてる。」

その表情は昼に見た覚えがあった。

この雰囲気は良くない。

頭の中に警報が鳴り響いたが、私には隆哉の感情を制御することは出来なかった。

「悪いけど、昼言った通り、もう我慢しないから。」

頬をわずかに染めて、私に向き直る。

「なんか、意味わかんないけどお前が泣いてなあなあになったままじゃやだし。」

「はあ。」

やけに気が抜けた返事が私の口から紡ぎだされる。私はとても逃げ出したい気持ちになっていた。

「でもさっきお前が泣いた顔、けっこうキタけど。もっと泣かせたいていうか。」

「そですか。」

「オレ、良く考えたらずっとフォワードなんだよね。」

「そうなんですか。」

だから何だ。

魂を遠くに飛ばしたいなあ、どうすればこの空気を壊せるのだろうか。

「話、聞けよ。」

隆哉の声が一気に低くなって、私は全身が震えた。

こ、こえー。本気だ、彼は。

「何、怖がつてんの？」

彼のいつもは爽やかスポーツマン風な顔は、現在邪悪な笑みに支配されていた。

「オレは、庸ちゃん……庸子の事が好きなんだよ。『お姉ちゃん』としてじゃなく。」

逃げ場は、無かった。

私もそれほど空気が読めない人間ではないから、隆哉の視線や態度になんだか落ち着かない気持ちになることは時々あった。でも、それを否定したい思いが強くて、姉弟なんだからって余計不自然に構ったりしてたのかも今は思う。

だから「私も好きだよ、可愛い弟だもん」なんていう逃げ方は許してもらえそうにないことは一瞬で理解した。

そんなことを冷静に考えてる状況ではないんだけど。

「そっか。」

私の口から初めて出た言葉がそれだったことに、隆哉は拍子抜けしたみたいな表情を見せる。

「随分な反応だね。」

「どんなのを予測してたわけ？」

私はなるべく感情を込めず、そう返答しながらドアとの距離を目で測る。最悪トイレに逃亡しよう。

「ふーん。」

隆哉は面白くなさそうに笑って、ベットから立ち上がった。

そう広くもない私の部屋だ。距離が一気に縮まる。

「冷静に應對してオレの頭を覚ましてくれようとしてくれるってこと？」

見下ろされた視線は攻撃性に溢れていて、視線を逸らすことすら許そうとしないのが伝わってきた。

……私の心、既に折れかけてきた。

多分隆哉はこの部屋に来る前に私の反応なんて100通りくらい予測してて、その対処策も十分に練っているような、そんな気がする。そういう人間だ。

「悪いけど、もう冷静に考え尽くした結果、コクりにきたわけだか

ら。」

笑顔を崩さないけど、全然いつもの隆哉と違う笑い方だった。

「じゃなきゃ、いつまで経ってもお前にとってオレは弟のままだし。」

「だって、弟でしょ。」

間髪いれずそういうと、隆哉の目がギラリと光った気がした。

「……変なのがオレだってことは分かってる。」

押し殺したような声だった。

「でも、何も言わないでずっと一緒にいるの、苦しすぎるんだ。」

思わず私は隆哉から目を逸らした。

「どうしたいのか、全然わかんないよ。」

ぼつりと小さく呟いた。

思いが叶ったとして、余りに行き場のない関係ではないか。……お父さんやお母さんの顔を思い浮かべて、胸が痛んだ。

眉を寄せて隆哉を見上げると、彼は小さく息を吐いて腰を落とした。しゃがむと、今度は椅子に座った私のほうが視線が高くなる。

「実のところ、オレもどーしたいのか良くわかんないんだよね。」
はあ。

私がぼかんとした顔をしたのを見て、隆哉も可笑しそうに笑った。
年相応の笑い方。

戦闘態勢解除かも。

私はひそかに体のこわばりを解いた。

「何ソレ。そんなこと言われても困るよ。」

よし、このまま和やかムードに移ることを狙おう。

「もっと、困ってよ。」

「あーうん、って」

安心しかかって気を抜いていただけに、言葉が頭にストレートに入ってくる。

隆哉の笑顔は、再び攻撃的なものになっていた。

「お前が、もっとオレのこと、色々考えて悩んだり困ったりすると

ころ見たいんだ。」

強く左手首をつかまれ、そこから熱が伝わってきた。

「オレばかりかりお前のこと考えて、不公平だと前から思ってた。お前も同じくらい悩めばいい。」

「何、それ。」

掴まれた手を振りほどこうとするが、反抗した瞬間力が込められて、かなわない。

「だから、隆哉とはずっと一緒にいるわけだし。」

腕を掴む隆哉の手に視線を向けながら、私はボソボソと言った。

「姉弟だし、そういう対象には全然見られないって……。」

「見てよ。」

「無理だって。」

「……ずっと一緒だからだめだっていうなら、同じだけ離れたらいってこと!？」

その口調は激しくて、私は口を閉じた。これほど真剣な瞳に対峙したら、茶化してごまかすことなんて無理だ。

どこでこんな大人な表情を学んできたんだろう。

掴まれた手を一気に引かれ、かき抱かれた。

「そんなくらいなら、待つ。……いつまでだって待つ、良いって言ってくれるなら。」

…… なななな。

なんだこの状況――！

血液が沸騰しそう。

私の頭は混乱状態だ。

ややや、やばし。まじやばし。

自分から弟に抱きつく分には感じなかったが、彼の腕はしっかり筋肉がついていてすっかり男のものだった。

二つも年下のつい二ヶ月前まで中学生だった弟に圧倒されている。

振りほどこうにも、隆哉は小学低学年からサッカーに親しんできた少年だ。体育会系を甘く見てはいけない。

というか。

「窒息するってー！！！」

首筋でもがくと、隆哉の肩がびくつと動き一気に体が離された。

「くっ、首に口当ててしゃべんな！！」

頬が真つ赤になってるけど、それを突っ込む余裕なんて無い。私だつて負けてないくらい、赤面してると思う。

「とにかく、意味分かんないからっ！」

立ち上がった隆哉の背中をぐいぐい押して、部屋から押し出す。

勢いが大切。力じゃ負けるから、気迫では勝つべし。

「さつさとテスト勉強しなよ！馬鹿、アホ！変態！エロス！！」

とりあえず思いついた罵声を浴びせ、部屋から追い出した。

あ、鍵。

私は少しばかりためらった後、それをかけた。がちゃりとやけに重い音がした。

なんだか頭が混乱していて、勉強机に向かう気にはもうなれない。

熱い頬を押さえてベットにもぐり、体を丸めた。

「あーーーーー」

枕に顔をうずめて、ジタバタした。なんなの。

ほんとに、なんなの。

結局あのは弟の突然の告白で頭がごちゃごちゃになって、うとうとしては起きるのを繰り返していたらいつの間にか朝になっていた。

朝ごはん、パン焼いて紅茶入れるくらいでいいかな。今日は土曜日でもなら早い（もしくははない）父母は起きるのが昼近くになるから、二人分用意すればいいはず。

私も去年までなら土曜は休日だったんだけど、今年に入ってから受験生のために特別講習が行われることになったため、午前中は授業がある。

隆哉の学校はテストだって言っていたよね。顔、あんまり合わせたくないな。

いつもより一時間位早いけど、どうせ寝付けないしさっさと支度して家を出てしまおうか。

一晩考えたけど、弟にどういう対応をすればいいか全然わからなかった。

そもその問題として、「付き合って」とかそういった「はい／いいえ」で答えられるような告白をされてないし。

なるべく音がしないように鍵を開け、細心の注意を払ってドアを開ける。廊下の電気は点いていないけど、窓から日が差していて十分明るい。

父母の寝室から父のいびきがかすかに聞こえてきて、思わず微笑が浮かんだ。

よくお母さん、同じ部屋で寝られるよねえ。

後ろ手でドアを閉め廊下に一歩踏み出したとき、隆哉の部屋のノブががちやりと音を立てた。

「……！」

びっくりして思わず叫びそうになったけど、どうにか声を飲み込んだ。

姿が見える前に気づかない振りして下の階へ行ってしまうのか。そう思ったけど、行動に移すより早く隆哉が部屋から出てきてしまったので諦めた。

「おはよう。早いね。」

何気なさを装ってそう言うと、隆哉からも挨拶が返ってくる。

「……おはよう。」

テンション低めだけど、低血圧なのかいつもこんなものだ。

二人並んで階段を降りる。

寝不足だけど、背後に隆哉がいる緊張感で頭が一気に覚醒した。

もうごちゃごちゃ考えても仕方ない。普通が一番。

いつもどおりにするしかない。

「パン焼くけど、何枚食べる？」

「……メシいらねー。シャワー浴びる。」

「そう。」

ハイ、階段降りきるまでに会話終了。五秒も経ってない気が……。

後頭部に突き刺さる視線を感じながら、最後の一段にたどり着いた。そう長くも無い距離でコレですか。こんな調子じゃ登校するまでにクタクタになってしまいそうだ。

内心ため息をつきながら一階の廊下に一歩踏み出したとき、急に後ろから隆哉の手が回され、胸に抱え込まれた。

息が止まり、全身が震える。

「なんだ。」

私の耳元に、隆哉は笑いを含めた声で囁いた。

「お前、メチャクチャ意識してるじゃん。」

「なっ……！」

頬が一気に赤くなる。

気まずくなったら隆哉だって嫌かと思っただ姉の精一杯の気遣いを何だと思ってるのか。

色々言いたいことがあるのに、焦って言葉にならない。

口をパクパクさせている私の肩に隆哉の頭が乗った。

少し重い。

「……良かった。もう口利いてくれないかと思った。」

「え。」

その発想は無かったな、逃げようかとは思っただけど。

「ようやく言えたのに、余計苦しくて一晩中眠れなかった。」

結構深刻に参ってる感じで、その手を無理に振りほどく気にはなれなかった。

私は迷ったあげく、体をよじって無理やり右手を伸ばし、隆哉の頭を数回軽く小突く。

「今日テストだって言ってたけど、ヤバイんじゃないの？」

「……テスト中寝るかも。」

オイオイ。

頭を押して肩からどけて、隆哉に向き直る。

「私も隆哉のせいであんまし眠れなかったし、責任とれないからね。」

「

一息にそう言っで、くると体の向きを変え台所へと向かう。

なぜだか頬の熱さが引かなかった。

パンを焼いている間に、お湯を沸かし紅茶のティーバックを用意する。

寝不足気味だということと一時間ばかり早いことを除けばいつもの朝と変わらないことに私は安堵した。

弟がシャワーを浴び終わるまでは一人の時間。

さっきの階段下でのやり取りを思い返す。意識しないようにするのは無理だけど、両親の前で普通さを装う程度なら大丈夫かも。

……ってゆーかさー!!!!

私は再び熱を持ち始めた頬を両手で押さえて、一気にしゃがみこんだ。

思い返してみると、どうもこれまで隆哉に自分から抱きつくことはあっても、あつちから私につてのは無かったような気がする。

昨晚からのあの攻撃モードは何。

何かが乗り移ったって聞いても信じるよ、私。

私が認識してた弟つてのは、爽やかピュアそこそイケメン青春サツカー少年であって。

お姉ちゃんに背中から抱きつかれて照れつつそれを押し隠して「うぜー」とか言っちゃうキャラで。

だから、あんなのは知らない。

あんな、まるで男、みたいな弟は。……イヤ確かに男は男なんだけど。

よく考えて見なくても隆哉は十分男の子だって認識はしてた。でも弟だつてことで、スキンシップしすぎてたかも、ブラコンかもって自分で思うくらいには。

私が接触しすぎたせいで、思春期の少年的な勘違いをしてしまったのかもしれない。ホラ、身体の親しさ＝高感度、みたいな。

うわー、私のせいかも！！弟を健全な道に引き戻さなきゃ。

……家族、なんだから。

本当に大切な家族なんだから。

喉の奥からうなり声を出しつつ私が昨晚と同じように思考のエンドレスループに陥っていると、足音と共にリビングのドアが開いた。

「……何やってんの。」

ワシワシとタオルで頭を拭きつつ、近づいてくる。

昨晚も風呂上がりだったから、今朝は汗流しただけなんだろう。じやなきゃ時間的に早すぎる。

わたしはしゃきん、と気合を入れて立ち上がり、冷静さを装う。

トースターの方へ移動しつつ、隆哉と距離をとった。

もうとつくにお湯沸いてたし、パンも焼けている。

「別に。前から思ってたけど、隆哉、一日でシャワー何回浴びてんの。」

「んー、ベタベタすんの気になったらだから、部活終わったらと寝る前か朝どっちかで大体二回位？」

「ふーん。」

結構綺麗好きだな。

確かにいつ隆哉に接近しても男の子にしては爽やかな石鹸の香りがしてたような。

「不潔だって、嫌われないんで。」

思わせぶりな笑顔を向けられたが、気がつかない振りをする。

「テスト、頑張ってるね。寝ないように。」

「まあそこそ大丈夫だろ、数Aと現文だから暗記物じゃないし。」
隆哉はソファに座ってテレビをつけた。

隆哉の事は気にしないようにして、テーブルにトーストと紅茶を並べる。

迷ったけれど、結局パンは二枚焼いていた。

隆哉が食わなくても、お父さんかお母さんに食べてもらえばいいし。冷蔵庫からピーナツクリームを取り出して、それをすくうスプーンを用意する。

……。

なんかずっと視線を感じるけれど、気にしないようにする。

椅子を引き座って紅茶を一口飲んで目を閉じると、急に眠気が襲ってきた。

あー眠い。

今日、午前だけの授業で良かった。一応優等生で通ってるので、居眠りする自分は許せない。

目を開いて、トーストにクリームを塗る。

胃がムカムカするけど、何か食べないと授業中お腹が減ってしまう。トーストにかじりつくのと、私の横の椅子が引き出されるのは同時だった。

「なんかお前って動物っぽいよね。」

笑いをにじませた声でそう言いながら、椅子に腰掛けたのは隆哉。前から「お前」って呼ばれてたけど、それがやけに癪に障る。

四人がけのテーブルで三席空いてるんだから、わざわざ隣に座らなくても良いと思うんですけど。

隆哉側の身体半分に意識を持ってかれそうになるが、どうにか我慢した。

普通のことでしょ、いつもの席だし。

「紅茶、アレ。パン食べるならどうぞ。」

目は向けず、そっけなくそう言う。

少し身体を隆哉と反対側にずらしたのは誤差の範囲です。

「どうも。」

紅茶を取るために伸ばされた隆哉の腕が目の前を横切る。

スポーツメーカーの半そでTシャツから覗く腕には程よい筋肉がついていて、私の腕とは全然違うんだなあとしみじみ思った。

私の腕、どう見ても筋肉より脂肪のほうが多いもんね。血管見えな
いし。

トーストをもぐもぐ食べながらさりげなく横目で隆哉を見上げると、
紅茶を口元まで運んだ彼とばっちり目が合った。

私が思い切り目を逸らすと、隆哉は苦笑交じりに小さくため息をつ
いた。

「……あのさ、もうちょい普通にして。」

「え、全然おかしくないでしょ、フツーだし。」

私はそう言いつつ、パンをくわえたまま椅子をずらし、隆哉から身
体半分遠ざかる。

ぎぎー、という椅子を引く音が白々しく部屋に響いた。

「意識してくれんのは嬉しいけど、そういう態度とられたらちよっ
と傷つくっていうか。」

隆哉が紅茶をテーブルに置く音が響く。

「そんなに構えられると期待に答えなきゃいけない気になるよね。」

「はあ!？」

彼の笑顔、とても邪悪な感じなんですけど。

パンを落としそうになったが、どうにか持ち直す。

あーあ、指にクリームが付いちゃったよ。

「庸ちゃんは普通にしててよ。急に今までの関係壊せるとは思って
ないし。」

苦しめば良いとか、普通にしててとか……好きだ、とか。

「ずいぶん色々勝手なこと言うよね。」

隆哉を見る私の視線は、相当恨めし気なものになっていたと思う。

「ま、『弟』なんで。少しくらいワガママ聞いてよ。」

こんなときだけ弟アピールってどうなんだ。

そう思いつつも、隆哉の悪びれない笑顔につられて苦笑がもれる。

私の表情が緩んだのを見て安心したように隆哉は息をついた。

「まーさ、いつまでも弟扱いじゃキツイけど。」

私は気まずさを感じて思わず目を伏せた。

だって、弟でしょ……。

それを崩すことは、してはならない。

「これまでずっと考えてたし、夜も考えてた。

オレとお前が半分だけだけど血つながってるのはどうしようもない事実だし、オレはそれをどうでもいいって思うけど、お前がそう思うとは限らない。」

隆哉は紅茶のカップをに視線を移して言った。

「そんなん、わかってたし。お前は普通にしててよ、そのまんま。

頑張るんで。」

どう返事を返せば良いか困って、私はとりあえず微妙に笑ってみた。
……なんて言うか、やっぱりズルくはないですか。

悶々とした表情でいると、私の肘のすぐ横に隆哉は肘について顔を寄せた。

「言いたいことがあればどうぞ。」

「イイエ何も。大丈夫です。」

硬直し気味に私がそう答えると、隆哉は一瞬不機嫌な表情を見せた。

「口癖かもしれないけど、全然大丈夫に見えない時がほとんどだよなー、お前。」

皮肉っぽく笑って言う。

「大丈夫ってよく言うけど、それって周りを拒絶してんだよ。」

なんか、かちんときた。

「別に、拒絶なんかしてないけど。」

「つもりはなくても。……お前、いつも頑張ってた俺にはそんなんできないからすげえって思うけど、なんか見てて苦しくなる。」

隆哉の表情も口調も真剣なものになっていて、私が口を挟む隙はなかった。

「だから、お前の支えになれたらって思ってた。ガキだけど。」

なんかウチ、普通の家庭よりは色々あるだろ。気にすんなって言ってもお前は気にしちゃうの見てるし。

もつとオレを頼ってよ。そりゃ二コも年下だしわかんないこと一杯あるけど。

でも話聞くくらいなら、出来るんで。」

隆哉の言葉に視界の端がちよつとにじんだけど、我慢。そう連日泣いてたら姉のプライドに関わる。

はつきりいつて、告白なんかより嬉しい。

暖かい気持ちの底から溢れてくる。

ってか。あれ。

「え、今までもしてたよね。頼りにしてるし、色々話したりとかもしてたし。」

「でも、線があるじゃん。オレはそれが気に入らないの。」

私のわずかな抵抗はあっさり切り捨てられた。

「そんなあ、一体どうしろと……。」

心の中は自由でしょ。

もーなんなのメンドクサイ。

ネムイし。頭が働かないときにこんなシンドイ会話をなぜしなきゃいけない。

がつくり頭を下げていると、後頭部に隆哉の手が乗った。

「お前の……なんつーか味方だってこと忘れんなくてこと、言いたかったっていうかさ。」

一杯考えたんだけど、結局何言ってるか意味わかんねー。ゴメンね。

L

後頭部に乗せられただけの隆哉の手は暖かくて、でもなんだか落ち着かない。

謝られても、かえってどんな表情をすればいいのか困ってしまう。

「あーうん。」

一体何を肯定したのかよく分からないけど私が俯いたままそう言うのと、頭に乗せられた隆哉の手に力がこもった。
っていうか。

「……あのー、結構、イタイんですけど。」

ぐうつと頭を押されてピーナツバターたっぷり塗ったパンが顔にくつつく所だった。すんでの所で避けて横目で隆哉をにらむと、隆哉はふつと息を吐き出してからにやりと笑った。

「やっぱ、こういうのがいいや。」

「え？」

聞き返すと、更に笑みを深くする。

「こういう距離感。昨日から頑張ってみたけど、コレくらいがいい、今は。」

今は、を思い切り強調してそう言うなり、頭に乗せた手を一度離して私の手首を掴むと、もう一方の手で私が掴んでいたトーストをむしりとった。

「返してよ、もう一枚焼いてあるからそっち食べればいいでしょ。」

私のパン！半分しかまだ食べてないのに。

「いいじゃん。なんか塗るの面倒くさいし。」

そんな理由かよ！

私は勢い良く立ち上がると、パンを掴む隆哉の手首を両手で捕まえた。

「わ、ちょっと……押し掛かるなって……。」

良く考えてみたら、どう考えたって。

「返して、ね。」

につこり笑って低い声でそう言っ、そのまま隆哉の手からパンを口を含む。

私がむしゃむしゃ食べている間、隆哉はおとなしくしていた。

そう。いくら昨日から立場逆転を狙っていたように、私が姉であることに変わりはない。

今まで積み上げられてきた関係は、そう簡単に揺らがせられないんだからね。

最後の一口を口にしたときに私の歯に指が触れて、隆哉が身じろぎしたのを感じた。
痛かったかな。

口の中のパンを噛みながら、しばし隆哉と見つめあう。

隆哉の手、パン持った形のままだなあ。

あ、指にピーナツクリーム付いてる。さすがに舐めるのはマズいだろうけど、勿体無い。

もぐもぐもぐもぐ。

「……くそー。」

先に視線を外したのは隆哉だった。

うなりながら、顔を伏せる。

「天然で、コレかよ。」

何か言ってるけど気にとめず、私は空になったパン皿を流しへと持っていた。けっこのんびり食べていたから、そろそろ学校へいく準備をしないと。

食卓を見ると、机に上体を伏せたまま顔だけを上げた隆哉と目が合う。

私が食べ物奪ったみたいになってるけど、奪い返したただだからね。

「食べたいなら自分で塗って食べなよね。」

「別に腹減ってるわけじゃねーし。」

「テスト中お腹鳴ると、恥ずかしいよ。」

しぶしぶといった様子でパンを掴んだ隆哉を目の端に入れて、私は

二階の自分の部屋に戻った。

見てろ、とかそういったようなことを隆哉が言った気がしたけど、聞こえない振りをして。

挿話1 姉について

え？キョーダイ、ねえ。

いるよ。姉が一人。高三。

あー、うちの学校じゃ無い。どこって……普通の高校だよ。女子高。うん、まあそうだけど。ダイイチジョシ。

頭いいって？そりやどうも。あんだけ勉強してりやどの学校だつて入れると思うけど。

ガリベン……まではいかないな。

ていうか、別に人の姉なんてどうだっていいだろ。なんでそんな食いつくんだよ。

……そりやどうも。でもオレと全然似てないよ、アイツ。

なんつーかタイプが全然違うんだよな。性格も、顔も。

まあそんなにヒドくはないけど。見た目は……普通かな、地味な感じだけど。

気を使えばもうちよいマシになるはず。

多分来年大学入ったら全然印象変わっちゃうんだろうな。しかもアイツ理系だからきつと周り男子ばっかで。

はーあ。

え？あ、ごめん、何。全然聞いてなかったわ。

仲？まあ悪くはないと思う。

親共働きだから、あんま家に居ないし。どうしてもキョウダイで過ごす時間、多いから。

つーか、お前だって妹いるだろ。しょっちゅう話題にしてるじゃん。女キョウダイの実態なんて十分分かってるはずだろーが。

アイツラってほんと無神経なトコあるだろ、ソファアの上に下着、脱ぎ捨てたり。

いや、下じゃなく上の。服着たままアレを脱ぐんだよ、マジで手品だよな。

え、そんなことやらない？

いや、妹、そのうち絶対やるから。マジで。

ほんと無神経にできてんだよ。

風呂上りとかさあ、……こっちがどういう思いしてるか知りもしないで。

はーあ。

はあ！？

風呂場で鉢合わせるなんてねーよ。漫画の見すぎじゃねえか。

大体、オカシイだろ。お前、母ちゃんの裸見て欲情したりすんのか！？だろ。

妹の着替え見たってなんも感じないだろ！？

おかしいんだよ、な……。

あ、悪イ。別に怒ってない。急にでかい声出してゴメン。

てかさ、もうそんなどうでも良い話題止めて、さっさと部活行こ。

センパイ怒ってるんじゃないの。

へ？いつかウチに来たい？……まあいいけど。

そのうち、な。タイミングが合えば。

中間テスト明けの久しぶりの部活動だ。

新藤隆哉は廊下を歩きながら、横にいるクラスメイトとつい先ほど教室で交わされた会話を思い返していた。

変なりアクション、してないよな。大丈夫だよな。

心中ひそかに確認する。

半分血がづながった姉に彼が思いを告げたのは、昨夜のこと。

行き当たりばったりなものになってしまった感じはあるものの今までずっと思い悩んできた事だったため、寝不足からくるだるさはあったが頭の中は妙にすっきりしていた。

思いを打ち明けたときも朝リビングで会った際も、姉の瞳に嫌悪感は見取れなかった。隆哉はそのことを思い返し、唇をゆるませる。

今は知ってもらっただけでいい。忌々しいくらいに姉も、もちろん自分も常識つてものに縛られているから。

「キョーダイ、か。」

「あ？なんか言った？」

「何でもない。」

口の中でちいさく呟いたその言葉が横を歩く椎橋の耳に入ったように、隆哉は薄く笑ってごまかした。

積年の思いを打ち明けた隆哉の胸には喜びとわずかな後悔が同時に湧き上がっていた。

だって、例えば。

隆哉は吹き抜けになっている中庭に設置されたベンチに座る二人を、通り過ぎる際に横目でちらりと見た。明らかに彼氏と彼女だろう。お互いの間に置いた一冊の雑誌を顔を寄せ合って見ながら、楽しそうに会話を交わしている。

例えば、自分の思いが彼女に受け入れられたとしても、あんなふうに表立って並んで居られる二人には決してなれないだろう。

「あーマジで彼女欲しーわ。」

同じ情景を見たのだろう、並んで歩く椎橋の結構本気な叫びが耳に入り、隆哉は思考を切り替えた。

「お前、最近ホントそればっかだな。」

苦笑交じりにそう言つと、

「俺は健全な男子高校生なの。」

胸を張って返された。

中高一貫校であるこの学校で高校からの入学者が所属する外部受験クラス且つサッカー部という共通項がある人間は貴重だったし、この友人の素直で朗らかな性格は隆哉にとって好ましいものだった。名簿順で前後のため、入学して初めて話した相手でもある。

素直すぎて本能ダダモレなのが玉に瑕ってヤツか。

「ま、お前は実に健全だよな。」

羨望も込めてそう言ったのだが、椎橋はそうとは受け取らなかった

ようだ。

「余裕ぶってんな。お前だって欲しいだろー、カノジョ。」
カノジョというか、あいつが欲しい。

努力は惜しまないけど、今のところ勝敗予想は全くつかない状況だ。
「そりゃ、まあ欲しいは欲しいけど。」

隆哉が感情をおさえてそう答えると、椎橋は眉間を寄せた。

「余裕が感じられる！」

「余裕？」

ちつとも余裕なんかない。

姉は来年から大学生になる。

出来たら二浪してもらって同じ学年になって欲しいくらいの気持ち
だけど、あれだけ勉強していたら一浪の可能性ですら皆無だろう。
大学も女子大に行けばいいのに。

「お前はイケメンだからいいよなあ、くそー。」

冗談交じりに蹴りを入れつつ、椎橋はぼやいた。

隆哉はそれをかわして、言う。

「イケメンじゃねーよ。」

容姿なんか関係ない。好きなヤツに相手にされなきゃ意味がない。

「そもそも部活ばっかで出会いねーし。せめてねーちゃん紹介しろ
ー！！」

「絶対嫌だ。」

それにだけはかなり本気で返答して、隆哉は部室へ続く廊下を駆け
出した。

教室の会話で予想はしてたけど絶対何があってもコイツだけは家に
入れない、そう固く誓いながら。

隆哉に思いを打ち明けられてからもう二ヶ月近く経ち、期末テストが終わったところ。あとは夏休みの始まりを待つばかりだ。今年の夏は天王山。受験勉強にひたすら打ち込めばもろもろの雑念も消えるだろう。

「……んー。」

明かりが点いたのを感じて、私はソファの上で伸びをした。午前授業から帰ってきた後リビングで参考書を開きしばらく勉強していたが、頭痛がしたため横になったら寝てしまったようだ。天井の明かりがまぶしくて、目をぎゅっとつぶりながら落ちないよう注意しつつ寝返ってうつぶせの姿勢をとる。横たわる前にエアコンを切って窓を開けたため、全身がじっとり汗ばんでいた。

……何時？

四時半、か。一時間ちよいと寝てみたい。

少し上体を起こしてテレビの方の時計を見やれば、視界の端に隆哉をとらえた。

ダイニングテーブルとソファの間に立って、私を見ている。

「おかえり。帰ってきてたんだ。」

「部活、三時に終わったんで。」

こめかみを片手で押しながら体を起こそうとしてハッとした。……まずい、家に私しかいないと思ってノーブラ且つキャミソールなんですけど。さすがに下は中学時代の体操着であるハーフパンツ、ちゃんとはいてますが。パンツだけじゃなくて良かった。

やむなく再びソファにうつぶせになる。

部活帰りならシャワー浴びるだろうから、その間に部屋に戻ろう。

「……あっちな、何してんの。」

「あ、エアコン、つけるね。」

ソファの横のテーブルに置いてあったリモコンに手を伸ばすが、微妙な距離。焦りながら体を起こしつつ腕をのばしたら、バランスを崩してソファから上体が落ちた。

おでこをコレでもかという位サイドテーブルに打ち付けて、涙目になる。寝ぼけてフワフワした頭の中で、痛みだけにリアリティを感じた。

「……ほんとに、何してんの。」

サイドテーブルの足元にうずくまって痛みをやり過ごしている間にテレビの前を経由して廻りこんできたらしい、しゃがみこんだ気配と同時に頭のそばで隆哉の声がした。

続いて後頭部をかるくポンポン叩かれる。

「アホすぎじゃねーの？」

残念ながら否定できないのが情けない。

机に頭打ち付けるなんて、久しぶりだよ。

「スミマセン。」

顔を上げて前髪を除け、打った部分を見てもらおうと隆哉に視線を向けるとなんだか嫌な顔をされているのに気がつく。

「血は出てないけど、コブにはなるかもな。冷やしたほうが良い。」

そう言うなり、立ち上がったすたと歩き出す。

隆哉が台所の方に行ったのを確認してから、私は立ち上がって冷房を入れ、開けていた窓とドアを閉める。さっさと部屋に戻ろう。

置いたままにしていた参考書類を回収するためダイニングテーブルに向かったら、カウンター越しに隆哉と目が合った。

「ほら。」

声と同時に何かが投げられて、私はとっさにそれを受け取った。濡れタオル。

「どんくせー。」

後頭部をワシワシかき上げながら隆哉はそう言つと、ドアの近くに置いてあったスポーツバッグを持って部屋から出て行った。

憎まれ口は叩くけど、何だかんだで優しいよねー。

おでこに塗れたタオルの冷たい感触を感じつつ、私は微笑んだ。
あ、だらしのないこの格好見られちゃったけど、まあ仕方ないか。

私たちはこんな感じで、多少は意識し合ってはいるものの、おおむね普通に暮らしている。

私って自覚してるより随分悪い奴なんだ。

利己的で、傲慢。

一言、はつきり言ってあげたらすぐに楽にさせてあげられるだろう。

そう思うだけで実行に移せないのは私が姑息なヤツだからだ。

「人の好意に浸かって生きるのは、気持ち良い？」

自分の部屋でベットに仰向けに転がって、一人呟く。

「それとも好きだったり、する？」

弟としては大好きだけど、恋人としての好意とどう違うのか良く分からない。

分かりたくない。

お父さん、お母さん、私、隆哉。四人で築く幸せな家族。それで十分じゃないか。

「今のままでいい」彼のそんな言葉を都合よく受け取って、未だにプラコンという隠れ蓑をまとい、仲が良い姉弟の仮面をかぶり続けている。

本当の悪魔はあの人じゃなくて、私なのかも知れない。

だから、罰が当たったのだ。

●●●●●

「新藤庸子……ちゃん？」

車道からよく通る声でそう呼びかけられたのは終業式の翌日、単科でとっている夏期講習を午前中に受講した後のことだった。

駅前のロータリーに留まった一台のシルバーの車は夏の日差しを受けてぴかぴかに光っている。

女性の落ち着いた印象の声に思い当たる顔は浮かばず、怪訝な顔で振り返る。

振り返って、しまった。

「びっくりした、本当に会えるなんて思わなかった」

助手席から勢い良く降りてきたのは、華やかな雰囲気美人だった。

こげ茶のセミロングの髪がゆるくカーブを描いて、肩の上で揺れている。オフホワイトのスーツが似合っていた。

「所長！」

「鞆だけちょうだい。14時には戻るわ。電車で帰るから先に行っていて」

車内から焦ったように声をかけた若い男に冷淡にそう返し、女性は微笑を浮かべて私に向き直る。

「まさか偶然会えるなんて思わなかった。嬉しい」

彼女の笑みは更に深くなる。

人違いではありませんか、思わずそう言いかけた。しかし、強烈な記憶が脳裏をよぎり私はしばし呼吸を止めて女性の顔を凝視した。否定したいけれど、目の形、鼻筋、笑顔を形作る唇、どれをとっても似ている。……鏡で見た自分に。

女性の雰囲気はあの時と大分変わっているけれど。

「あら、私のこと忘れちゃった？」

面白そうに、彼女は顔をわずかに傾けて私を見る。

「約10年ぶりとはいえ、母親の顔忘れるなんて薄情ね」

やはりそうかと私は視線を逸らして足元を見つめた。黒いアスファルトは太陽の日差しにジリジリ焦がされている。

私を生んだ人。

私を捨てた人。

今度は何を壊しに来たの？

私は余程固い表情をしていたのだろう。

「なーんて、ね」

女は首をかしげて微笑んだが、私は全身をこわばらせて立ちすくんだままだ。

「忘れてるなんて当たり前よね、私も直接会ってビックリしたわ。似てるって聞いてたけど、これ程とはね……」

女は感慨深げに一人で話している。

「そんなに警戒しないで」

苦笑交じりにそう言われたが、こわばりは取れない。

さっさとこの場を去れば良いじゃないか、そんな思いに反して足に力が入らない。

「誤解しないで欲しいんだけど、尾行してたとかそんなのじゃないから」

私が黙ったまま立ち尽くしていると、焦ったように女の方はそう言った。隙がなさそうな美人の印象が崩れる。

「さっきも言ったと思うけれど、仕事の都合でたまたま外出してたあなたに会えたっただけだからあたしも凄く動揺してて」

かわいらしい、そんな形容詞が頭の中に浮かんた。

この女の方が私を生んだのは確か20代になったばかりのはずだから、きつと30代後半というのが現在の彼女の年齢だと思われる。その年齢から思い描く女性のイメージより目の前の彼女は驚くほどに若かった。

十年前の魔女のイメージと実物との乖離に私は息を呑んでいた。乾ききつた喉が鳴る。

もっと記憶の中の彼女は、大きくて強圧的で暗い雰囲気をもっていたように思う。

『あなただけが……なんだって』

耳元であの声がしたような気がして、私は顔を歪めた。
確かに十年前のあの時、この女は私に囁いた。

『あなただけが仲間はずれなんだって』

私は地面から目を上げ、彼女を静かに見つめた。

私がああ記憶の闇に飲まれないように必死だった年月、この人は何をしていたのか。

私のあの時の記憶が混乱していたのか、それともこの人が変わったのか。

不思議なことに、彼女を責める気持ちにはなれなかった。

「あの、いきなりだしあなたも驚いてるよね、ごめんね」

彼女は頬に落ちた髪を耳に掛けた。そのまま腕時計をちらりと見て、私に向き直る。

「この後時間の都合は大丈夫かな、昼食一緒にどうかと思うんだけど」

「え……」

いきなりの提案に眉をひそめた私の反応を伺うことなく、左腕が彼女に握られた。

「もーぱつとしない店ばっかりだけど仕方ないか、急だったし。悪いけど我慢してね」

手を引かれるがままに私は彼女の後に続くのみ。

驚きと戸惑いと。

浮かんた感情は怒りでも恐怖でもない。無感動ではあるんだけど何だろうこの気持ち、好奇心とでも表現すれば良いのだろうか。

私は目の前をふわふわ揺れる彼女の茶色がかった毛先から目が離せなかった。

4（前書き）

更新空いてすみません（一ヶ月ちょい）。

前回のダイジェスト

主人公は夏期講習の帰り女性に声をかけられる。その女は生き別れの母親のようだったが、記憶の彼女と雰囲気全然変わっていたのでビックリ。一緒にランチすることに……

私が生みの母である女の人に連れられた先は、駅前から歩いてすぐの煩雑な通りにあるこじんまりしたレストランだった。一番スタンダードなパスタのセットランチを私も前に座った女の人注文する。昼食時のため、店はほぼ満席だった。

余り外食をしないので、何だか居心地が悪い。平日の昼食はお弁当、それ以外は家で食べることが多いからこういうお店には気後れしてしまう。

おまけに連れはこの人だ、落ち着ける訳が無い。顔を上げて正面に座る彼女を見上げたら思い切り目が合ってしまい、どぎまぎした。「元気に暮らしてるんだ、良かった。……高校生だよな」

「三年です」

「そっかあ、受験生か。受験って響き、懐かしいな。塾とか行ってるの？」

「今、その帰りでした」

差しさわりの無い会話をしながら、注文した料理が揃うのを待つ。セットのサラダとスープはすぐにテーブルに出されたが、手をつける気になれなかった。

「あの、キョージ……えっと、あなたのお父さんはどこまで話してるのか分からないんだけど」

「お待たせしました」

女の人が何か重要そうな話を話し出した途端、店員さんが料理を運んでくる。

タイミングが良いのか悪いのか。

苦笑する女の人を見て、私は気を取り直した。

お父さんのこと名前で呼ぼうとした、それだけで少し動揺してしまったことを自覚し、気合を入れ直す。そんなんで、この先この人と会話できるのか。

「本日のパスタはトマトとアンチョビの娼婦風スパゲッティでございます」

目の前に置かれたのはトマトソースのスパゲッティ。

その赤を見て十年前に会ったこの人の記憶が思い起こされ、私は机の下のかぶしに力を込めた。

赤い唇、悪意が宿った瞳。

目の前の彼女に視線を向ける。彼女の雰囲気は穏やかで、過去の記憶と結びつけることが難しかった。

目が合った瞬間彼女はにこりと微笑み、私の心臓はどきりと鳴った。

「間が悪いけどとりあえず食べましょ、のびちゃう前に」

私は軽く頷きフォークを手に取った。

「適当に入った店だけど結構おいしかったね」

「……はい」

「そう、良かった」

彼女は淡く笑って、前髪をゆっくり掻き揚げた。

私たちの間のテーブルに載ったお皿は共に空になっていた。

肯定の返事はしたもの、全然味なんて分からなかった。私はどこに視線を向けたら良いのか悩んだ挙句、皿の上に残った赤いソースの跡を見つめていた。

「……どこまで聞いているのか、確認してもいいかな？」

その言葉に、私は息を飲んだ。

どこまで聞いているか？一体何について。

私とあなたの関係？

父と私の関係？

……そんなの、何も聞いてない。

私は父の連れ子で、父と母は私が通っていた保育園で出会い結婚し隆哉が生まれた。

約十年前に生みの母親であるこの女性が突然現れ私を数日連れま

わし、大きな騒ぎになったような記憶があるけれどそれは一家のタブーのようになっていく。情けないことに、そのことについてほとんど私の記憶は無い。

私が知っているのは、それだけ。

両親には、特に父には聞けない空気があったから、私もこれまで気にならない振りをすることに努めていた。

でも、それは良いことなのか、良いことだったのか。

私は一度強くこぶしを握り、顔を上げた。

「ほとんど知らないけど、知りたいと思っていました」

かまをかけることも思い浮かんだけれど正直に言ったほうが良いような気がして、私はそう言った。

父が言わなかったのにも何か理由があるだろうから。

無理に知ることはないけど、私自身の出生に関することだ。知りたい気持ちはある。

チャンスは逃したくない。

私は唇を引き結んだ。

「……そう」

彼女は物憂げに私を見た。

「こういうのは早く言ったほうが良いって聞くのに。恭司の奴……」
小声で不機嫌そうに早口で呟く。

「ま、あたしは批判できる立場なんかにないんだけどね。了解、あなたを生んだときの話とか色々したいんだけど」

女はそこで言葉を切って、腕時計をチラリと見た。

シルバーのブレスタイプ。いかにも大人の働く女といった感じだ。
「ちょっと時間が足りないかな。尻切れになるのも良くないし。また、今度でも良い？携帯教えて」

「えっと……」

私がためらっているうちに、女はテーブル越しに手を伸ばして私の携帯電話を捕獲し、赤外線通信でアドレスを交換していた。手際の良さに思わずボーっとしてしまい、言われるがままに携帯、渡し

てたよ……。

その後すぐに店を出た。会計は当然の様に女が支払ってくれて、私は大してお金も入っていないノーブランドの財布を左手に持ちつつ、所在無く女の後ろ姿を見つめていた。

「ゴメンね、急がせちゃって。あ、名刺渡しとく。あたし、税理士事務所開いてんの。また連絡するねー」

女は慌しげに別れの挨拶をし、駅へ続く道を颯爽と歩いていった。私はその姿勢がいい後姿をぼんやり見つめていることに気づき我に返ると、身を翻して正反対の方向である自宅への道を歩き出した。

『また連絡するね』、女の言葉を思い返したら鞆の中の携帯電話の重みを感じた。

帰宅後部屋着に着替えてもいつ鳴るのかと思ったら落ち着かなくて、ずっとズボンのポケットに携帯電話を入れていた。意識しないように努めていたけど、なかなか難しい。

産みの親のことを、なんと呼べばいいのだろう。母という呼称は全くしっくりこないし、何となく彼女もそれを好まないような気がする。

渡された名刺には『高浜玲子』という名前が記載されていた。高浜玲子税理士事務所なるものを都内に開いているらしい。

彼女のことなんて名前ですらこれまで知らなかったわけで、これからどんな関係を自分と彼女が望んでるかなんて全然わからない。でも、とりあえず事実だけは知りたいと思っている。なぜ自分が生まれて、この暖かな家庭で育つことになったのか。

「……ちゃん」

「わっ」

呼びかけられた声に驚いて、思わず叫んでしまった。

「……さっきから呼んでたけど、驚かせたならごめんね」

首を傾げてソファに座る私を見下ろしたのはお母さんだった。

今日は五時上がりで、キッチンで夕食を作っていたはず。手伝いはいいと言われた私は何か指示されるまではと、ソファに座ってテレビを見ながら携帯をいじくっていた。思索に思い切り沈んでいたらしい。

「悪いんだけど、盛り付けだけお願いしてもいい？ お母さん、お皿洗っちゃうから」

「うん、わかった。ちょっとぼーっとしてた」

元気良くそう言って立ち上がったら、この時間には珍しいことにダイニングテーブルに座っている隆哉と目が合った。

いつから居たのか、部屋に入ってきたことにも全然気がつかなか

った。

「帰って来てたんだ」

「ついさっき」

部活帰りらしくいかにも運動部といった雰囲気のジャージのまま、麦茶をグラスに注いでごくごく飲んでいる。

「もうご飯にするよー！ 隆哉もお風呂は後にして先にご飯食べちゃいなさい。お父さんももう少しで帰ってくるって」

「わかったよ」

お母さんの言葉にしぶしぶうなずきながら立ち上がる隆哉の横を通り過ぎて、私はキッチンに入ってしまった。

夕食も片付けも終わったが、まだ携帯に連絡は無い。

まだ半日。そもそも連絡なんて来るかもわかんないし。

自分の部屋に戻りたくない気分だった私は、夕食の片づけが終わった後ソファーにもたれかかりテレビをぼんやり見ていた。隆哉も両親も二階へとうに上がっている。

映っているバラエティ番組は毎週見ていないため、全然笑いどころがわからない。

はぁ。小さくため息をついた私の横で、声がした。

「またため息」

隆哉だ。言うなりソファーの横にどすんと腰を下ろし、その衝撃で私の体も揺れた。

「何かあったの、今日」

横目でちらりと私を見る。

「え、別に何も無いけど」

言いながら携帯をポケットにしまった私に鋭い視線を向けて、隆哉もため息をついた。

……何か私、した？

「無いなら、いいけど」

機嫌の悪さをにじませながら隆哉は立ち上がった。

「うん」

私はそう答えるしかない。

「良かったら、何か飲み物いれよっか。紅茶とか」
「うん」

私の提案に頷いてくれた隆哉にほっとする。

悪いけど今はまだ誰にも相談する気になれない、こんな何もわからない状況では。

テレビを消して私は立ち上り、先に台所に入った隆哉を追いかけた。

産みの親であるらしい高浜玲子さんからメールで連絡が来たのは夜も更けた時刻だった。

『昼間はどうもありがとう。高浜玲子です。』

仕事のため連絡がこんな時間になり申し訳ありません。

金曜の夜か日曜に時間があつたら会えませんか。』

暗い部屋の中光る画面を見つめ、細く息を吐き出した。今週末は模試がある。日曜の午後三時に終わる予定だ。

ためらったのは一瞬だけだった。直ぐに返信画面を開く。

『日曜夕方からなら大丈夫です。模試が三時までなので』

それだけ打ち込んで直ぐに送信する。すぐに模試会場の場所を問うメールが返ってきたためそれに返信すると、試験終了時間に会場最寄駅前にて集合する提案がされた。異存ないといった意味合いのメールを返し、玲子さんとのやり取りは終わる。

寝入りかけていたのに目が覚めてしまった。

私は静かに起き上がり、学習机に腰を下ろして閉じたばかりの問題集とノートを広げた。

過去は決して変えられない。私があの人に出会ったのは、事実を知りたいだけだ。そこから先に望む事など何も無い。

純粹なる好奇心。大したことではない。

何度もそう思いながらテキストの文字を追っているうちに、浮ついた気持ちは落ち着いてきた。

集中して勉強に取り組まないと。私は受験生なのだ。

『要らない子の癖に』

不意に頭に響いた遠い記憶の中の言葉は、以前ほど私の心に痛みを与えなかった。

そわそわしながらも夏期講習へ行ったり、その復習をしたり、家

事の手伝いをしたりしていたらあつという間に週末になった。レベ
ルが高い模試のため手を抜くことはできない。寝不足気味の頭で筆
記用具と学生証や財布など受験に必要な持ち物のチェックを行
う。

玲子さんは明日、模試会場の駅まで迎えに来てくれるらしい。お
気に入りの店に連れて行ってくれるとの話だけど、はつきり言っ
てこっちはファミレスでも何でも良い。肝心の話だけ聞いてさっさと
帰りたいというのが本音だ。今更馴れ合う気は全く無い。

勢い良くファスナーを閉めてから鞆を足元に放って、私はベット
に横たわった。

何だか、ほんと最近精神的に疲れている気がする……。

予想はしていたが、模擬試験の難易度は相当なものだった。

試験終了の合図の後、速やかに解答用紙を回収した試験官が教卓の前で結果の郵送日についての説明を始めた。受験者たちはそれと同時に筆記用具をカバンの中にしまい出して、室内はざわめきだす。昨日土曜日は午後から夕方まで、模試二日目の今日は朝から昼食休憩を挟んで午後二時過ぎまで問題用紙と向き合っていた。

勉強もテストも嫌いじゃないが、予備校の教室というピリピリした空気の中で集中力を途切れさせずにテストに取り組むってかなり疲れる。

頬杖をついた手のひらの内であくびをかみ殺した。

正直なところさつさと帰宅して夕食前に昼寝でもしたい気持ちだったけど、約束がある。そうするわけにはいかなかった。

駅前にある案内板の前には既に待ち合わせ相手が来ていた。

黒い日傘とレース素材の黒いカーディガン、その下に着ているのは品の良い白いワンピース。

思わず自分のダサい制服を眺め下ろし、少し頬を引きつらせた。

こんな格好で来てしまったことを悔やむ。靴下は中途半端な丈で白いし三足で千円のやつで、鞆なんて中学時代から使い倒してる薄汚いサブバックだし……。

前回も思ったけど、ウチのお母さんや参観日に会う友人の親達とは明らかに人種が違ふとしか思えない雰囲気。彼女をまとっていた片足に体重をかけて立つ様はファッション雑誌から抜け出たように、声をかけることにためらいが生まれる。私みたいな普通の学生と全く接点がなさそうな人種だ。

綺麗な人、純粹にそう思った。

「すみません、暑い中お待たせしました」

足早に彼女に近づき、一息にそう言った。

暑いからだけじゃない汗が背中を伝う。

なんか、自分の格好のことが気になって落ち着かなかった。思わず俯きがちになると彼女の細くまっすぐな白い足が目に入り、どきりとする。

「こっちこそ、試験の後にごめんね。疲れたでしょ」

にこやかに微笑みながら、彼女は柔らかな声音で私へねぎらいの言葉をかけた。

「いえ、別に……」

口ごもりつつ腕の時計を確認する。時刻は午後二時二十分を示していた。待ち合わせに五分も遅刻してしまった。彼女がいつからこの場所に居たかは分らないが、この炎天下だというのに汗が浮かんでいないのは驚きだった。こういう人種は汗をかかないのかも知れない。

「お昼は食べたの？ お腹は空いてないかな」

「はい、試験の合間にお弁当を食べたので」

「そう、良かった。夕食、予約してるんだけど大丈夫だね」

「え、ああ、はい。大丈夫です」

軽くお茶をする程度の認識だったので、思ったより拘束時間が長くなりそうなことに少しうんざりしたが、話す内容が内容だ。お母さんに「友人と外食する」とてもメールすれば問題無いだろう。そもそも、今日も働いていたような気がする。

「そう。じゃあ、行きましょうか」

語尾にハートや音符などの記号が見えるようなはしゃいだ声を出して、玲子さんは私の左腕に腕をからめた。

むき出しの腕同士の感覚とふわりと微かにいかにも大人、といった香りに私は身をこわばらせた。

距離近いんだけど、この人。

「あ、イヤかな。なんか娘っていうか年の離れた妹、みたいな感覚で一緒にどっか行くみたいなの嬉しくて……」

彼女は体を離しつつ、なぜか照れた様子で私を伺うように見た。そりゃあ、アンタに育てられた覚えありませんから、そう思うのも当然でしょうが。

私は冷たい視線を彼女に送った。

「夕食まで時間あるし、買い物いきましょ！」

きゅっと左手を握られる。

「え……あの」

「会える時しかこういうこととしてあげられないし。出発！」

「え、ちよっと……」

戸惑う私に目もくれず、彼女はぐんぐんタクシー乗り場まで歩みを進める。

半分押し入れられるようにして後部座席に乗り、彼女と並んで座った。

行き先を運転手に告げる彼女を苦々しく思いつつ、あまりに楽しそうな表情に毒気を抜かれた。

「どこへ行くんですか」

「え、庸子ちゃんプチイメチェンツアー？」

ぶりっ子のように小首を傾げつつ玲子さんは答えた。

……意味がわからない。

この人、やっぱり苦手だ。

7（後書き）

あけましておめでとうございます。

皆様にとって2012年が素晴らしいものになりますように。

そしてこの連載をちゃんと完結させられますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1683t/>

ファミリーラヴァーズ

2012年1月11日17時54分発行